

資 料

## 2009 ワールドコンGRESS及びNATA 年次総会参加報告

高橋 陽介、小西 裕之

The report after attending 2009 World Congress and NATA annual meeting  
TAKAHASHI Yosuke, KONISHI Hiroyuki

The purpose of this report is to make some points of view for the development of athletic trainer as health care provider in Japan. These are based on what I experienced and felt while attending 2009 World Congress and NATA annual meeting. The points are: (1) to encourage research and study to athletic training students and faculties in universities; (2) to create more international relationships among universities in North America, Europe, and Japan; (3) to appeal the importance of emergency action plan at each sport team in order to have people recognize the need of athletic trainers in Japan.

Key words: World Congress, NATA annual meeting, WFATT, health care providers

### I. はじめに

2009年6月15日から20日までアメリカ合衆国テキサス州サンアントニオにおいて、スポーツ活動に参加する人々の健康・身体管理をおこなうヘルスケアの専門家たちのための、ワールドコンGRESS及び全米アスレティックトレーナー協会（以下NATAとする）年次総会が開催された。ワールドコンGRESSは今回で4回目、そしてNATA年次総会は60回目を数えた。

ワールドコンGRESSはアスレティックトレーニング・セラピー世界連合= The World Federation of Athletic Training and Therapy（以下WFATTとする）による主催で2年に1度開催される学会である。ワールドコンGRESSでは、北米地域だけでなくヨーロッパ圏やアジア圏など世界の国々でスポーツ現場のヘルスケアの専門家として働く人たちが傷害予防や処置方法などアスリートの健康・身体管理に必要な幅広い情報や知識を交換し合える場となってい

る。WFATTが設立された使命と目的は、(1) 世界的規模でヘルスケアに関する情報を交換することによって学問、そして専門職としてその発展を目指す(2) 協会メンバー間で協力し合い研究をおこなうことでヘルスケアの発展を担う(3) スポーツにおけるヘルスケアの国内または国際的な発展を奨励することである<sup>1)</sup>。

WFATTにより公式認可された協会や団体は全部で7つあり、それらは：① Association of Chartered Physiotherapists in Sports Medicine (ACSM)、② Biokinetics Association of South Africa、③ Canadian Athletic Therapists' Association (CATA)、④ Japan Sports Association、⑤ Japan Athletic Trainers' Organization (JATO)、⑥ National Athletic Trainers' Association、⑦ Taiwan Athletic Trainers' Society<sup>1)</sup>。そして、まだWFATTによって公式的に認可はされていないが他にも13ものスポーツ協会や団体がメンバーとして加盟している。

今回で60回目を向かえたNATA年次総会は、NATAが1950年に設立されて以降毎年1

度おこなわれている学会である。そこで、アスレティックトレーナーのためのセミナーやワークショップで、新しい知識や技術を研修し、アスレティックトレーナーに研究を奨励して、それを発表できる場として設けられている。現在、約 30,000 名を越える会員が NATA のメンバーとして属しており、そのうち約 17,000 名が公認資格保有者である<sup>2)</sup>。NATA 総会では、NATA のメンバーである資格保有者だけではなく、資格を持たずメンバーでもない一般の人々も登録すれば参加が認められている。これも NATA が目的としているアスレティックトレーニングを世の中に広める活動の一環であると考えられる。

職名や肩書きは異なるもののアメリカ合衆国や日本だけでなく世界各地でもスポーツの現場でヘルスケアの専門家として働く人材が増加している。例えば、アメリカ合衆国や日本、台湾ではアスレティックトレーナーと呼ばれているこのヘルスケアの専門家は、カナダや中国ではアスレティックセラピスト、ヨーロッパ圏ではスポーツ（フィジオ）セラピスト、そして韓国では若干職種が異なるがエクササイズプロフェッショナルなどと呼ばれ、プロスポーツを始めとして、大学、高校、リハビリテーションクリニックなどで、アスリート達の健康・身体管理をおこなっている<sup>1)</sup>。このように、各国でそれぞれの仕事の責任や役割があり、様々なスポーツの現場で存在価値が認められ始めたアスレティックトレーナーは活躍の場を広げているのである。

ワールドコンGRESSをきっかけとして、スポーツの現場における世界各国のヘルスケアの専門家たちの間で近年様々な国際交流が行なわれている。その中でも特に WFATT 及び NATA は、スポーツにおけるヘルスケアの専門家たちの中で最も大きく国際交流を薦め、活動をおこなっている団体である。例えば、近年 WFATT スタッフ達は、中国や韓国へ赴きスポーツ現場でのヘルスケアの重要性をその国の人々に伝えた。また、NATA スタッフは、アイルランドのダブリンシティー大学に協力を依頼され、アスレティックトレーニングの教育

カリキュラムを作成することに貢献し、アスレティックトレーニングをアイルランドに広めようという活動の手助けをおこなった。

ワールドコンGRESSと NATA 年次総会への参加を通してとても多くのことを学び、そして今後日本でのアスレティックトレーニングの発展において個人または大学単位で取り組むべき課題は何であるのかを考えさせられた。

## Ⅱ. 本論

今回のワールドコンGRESSでは、主に世界各地のスポーツ現場でヘルスケアの専門家たちが、どのような活動をおこなっているかが紹介され、その専門家同士の情報交換や交流の場が設けられた。また、ヘルスケアの専門家にとって最重要任務のひとつである緊急時対応計画や救急法に関する技術、そして、傷（障）害をおった選手が復帰直前におこなうべきリハビリテーション方法などがセミナーやワークショップを通して講義された（図1）。



図1 ワールドコンGRESSでの講義風景

また、NATA 年次総会ではセミナーやワークショップを通して新しい技術や知識を学ぶだけではなく、Research & Education Foundation という機関により、学生や NATA 認定資格を保有したアスレティックトレーナー（以下 ATC とする）を奨励・助成し、研究結果を発表する場も設けられていた（図2）。他にも多くの医療品メーカーやスポーツ関連企業が出展

ブースを設け、学生や ATC らを対象にその企業の最新の商品や製品を紹介するスペースも設置されていた（図3）。

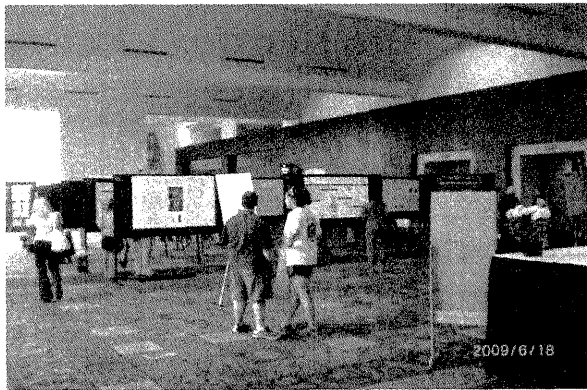


図2 リサーチポスタープレゼンテーションの風景



図3 出展ブースでの風景

本論では、主に初めて参加したワールドコンGRESSで受講してきたセミナー、ワークショップ、そして交流会に関する情報を提供し、これからの課題提起へとつなげていきたいと思う。

まずは、ワールドコンGRESS初日におこなわれたセミナーで、“緊急時対応計画と現場での救急法”について紹介する。そのセミナーでは、ジョージア大学の教授が緊急時対応計画を作成するにあたっての重要な点や、緊急時の対応方法などを、いくつかの症例を紹介しながら講義が行なわれた。特にアメリカンフットボールや体操競技など、頭部や脊髄神経の傷（障）害が多いスポーツ現場で、どのような対応や行動

を最優先に、且つ、的確に取ることが望ましいのかなどを詳しく説明された。アメリカンフットボールや体操競技だけでなく、コンタクトスポーツが行なわれている現場はもちろんのこと、そうでないスポーツ現場でも人命に関わり後遺症を残す可能性のある傷（障）害というのはいつ何時起こるかわからない。その中で、いかにすばやく正確な判断をくださかということ、は、アスレティックトレーナーにとって不可欠な知識と技術であるということを教授は繰り返し主張した。

午後におこなわれたセミナーは、“スポーツ傷（障）害予防”についての講義であった。3時間半という長い時間の中で、アイルランド、イギリス、日本から参加した代表者たちが、各国でおこなわれている傷（障）害予防方法などについて紹介した。

まずアイルランドの代表者は、アイルランドでのアスレティックトレーニング分野はとても新しい分野であり、アメリカのNATAの協力により数年前に大学のアスレティックトレーニングプログラムを構築させた事などを簡単に説明。そして、その代表者らが近年明らかにした新たな研究結果を発表した。その研究によれば、スポーツ選手の精神的ストレスがスポーツ傷（障）害を引き起こす確率を上げてしまうというものであった。しかし、その傷（障）害自体の重症度に関してはストレスがない選手と大きな違いが現れなかったと発表。結果、アスリートたちは普段の生活の中でいかにストレスを溜めないようにするかが、傷（障）害を予防する1つの方法であると結論付けた。

イギリスの代表者が講義したのは、マッサージにおけるスポーツ傷（障）害への関わりであった。イギリスにおいて、スポーツセラピーを教えている大学は現在のところあまり多くはないが、スポーツマッサージにおいてはとても多くの大学で取り扱われている科目であるという。研究のひとつで、スポーツマッサージがスポーツ傷（障）害の予防に効果があることを発見したことを紹介した。マッサージが物理学的、生理学的、神経学的、そして心理学的にどのような効果をもたらし、マッサージとストレッチを

組み合わせることによって傷（障）害の予防により効果がある事を明らかにした。

そして日本からの代表者は、日本女子バスケットボールリーグ（WJBL）が作成した膝関節前十字靱帯（ACL）損傷予防のためのエクササイズプログラムを紹介しながら日本でおこなわれているスポーツ傷（障）害予防の活動についての報告だった。

初日の夜は、レセプションとしてワールドコングレスの参加者全員を招待したディナーパーティーが開かれた（図4）。そこは参加者全員が他の参加者たちと交流を深められる場として設けられており、中には大学単位で今後更なる国際交流をどのように深めていくかなどの大きな話し合いの場を目にする事も珍しくはなかった。実際、各国からの参加者たちは情報交換にとっても積極的で、個人的にも多くの方々から話かけられた。日本への感心も高いようで、日本でどのようにアスレティックトレーナーとして活動しているのかなど色々なことを質問された。また、そこで知り合った大学の教授からも是非日本の大学との交流を持ちたいと打診されることもあった。



図4 ディナーパーティーの風景

2日目の午前におこなわれたセミナーは、“復帰直前の機能的リハビリテーション”についてであった。ここでは、カナダ、アメリカ、台湾の代表者が、それぞれの国で成果をあげている新しいリハビリテーション方法などを紹介した。

カナダの代表者が講義をしたのは、スポーツをおこなう上でとても重要である体幹（コア）のリハビリテーションエクササイズについてであった。下肢部（足、膝、腰など）の障害を予防し、さらにパフォーマンスを向上させるためには、体幹のバランスが重要だと述べていた。そして、走っている状態からの急な方向転換やストップ、そしてバスケットボールなどでよく使われる、片脚を軸として回転するピボットなどをおこなう際、身体の重心と、地面に接している足の位置がとても重要であると説明付け、方向転換、ストップ、そしてピボットは脚でおこなおうとするのではなく、重心のスムーズな移動により体幹でおこなうと示した。その際、地面に接している足の位置は、身体の重心から離れすぎても近すぎてもいけないという理論であった。それをおこなうことで、動きの中でのバランス、スピード、パワー、安定性が増し、パフォーマンスが向上する。それと同時に、下肢部に掛かる負担が軽減するので、障害も予防できるのだと纏めた。

次に、アメリカの代表者でインディアナ州のパデュー大学の教授が講義したのは、膝前十字靱帯手術後から復帰までのリハビリテーションについてであった。このセミナーは、その代表者の臨床経験に基づいた症例を紹介したものであった。その手術の方法は大変珍しく、前十字靱帯断裂側と反対の膝蓋骨腱の一部を切除して前十字靱帯の代わりをさせるというものであった。現在この手術方法を望んでおこなう医師は、リハビリテーションの大変さからもほとんどいないであろう。しかし、その整形外科チームは上記の手術方法をおこない、競技復帰までに通常6ヶ月以上はかかる<sup>3)</sup>ところを3ヶ月弱で競技復帰までさせ、その後も大きな問題は起こっていないことを報告した。患者にも個人差があるので、その手術方法やリハビリテーションを行えば必ず3ヶ月以内に競技復帰できるとは言い難いが、大変注目すべき研究結果であった。

そして最後に台湾の代表者からは、現在台湾でとても注目されているトレーニングマシンを開発したことについての発表であった。その

トレーニングマシンは台湾のレスリングチームや空手チームなどで使用され大きな成果を挙げたという。それは、プライオメトリックトレーニングを利用して、下半身全体の筋肉にエキセントリック収縮を受動的に引き起こさせるというものであった。そのマシンを使用してトレーニングをおこなった事で、腰に障害を持っていた選手も効果的に下半身のトレーニングをおこなうことが出来るようになり、大きく競技結果が向上させたということであった。

2 日目の午後は、セミナーではなく、WFATT ビジネスミーティングとインターナショナルエジュケーションサミットと題された会合が開かれた。そこでは、ワールドコンgresに参加したほぼすべての国の代表者が、ヘルスケアの専門家として、それぞれの国でどのような責任や役割を果たしているのかを紹介した。アメリカのアスレティックトレーナー、カナダのアスレティックセラピスト、そしてヨーロッパのフィジオセラピストたちは、各々の国で専門職としての役割を世間に大きく認知され、多くの職場が確保されているそうである。それに対して韓国、中国、台湾、そして日本などのアジア圏では、スポーツ現場でのヘルスケアの専門職という分野はまだまだ発展途上の地であるのが現状であった。但し、日本や韓国では、ここ 10 数年の間に徐々にスポーツ現場で存在価値が認められてきており、また台湾では、30 数年前から Athletic Trainer's Society という業界団体が認定資格を発行してアスレティックトレーナーの発展に努力を注いでいると報告した。どの国でも国際交流を積極的におこなっており、スポーツ現場でのヘルスケアの今後の発展にとっても意欲を持っていた。

最終日である 3 日目は、実際に参加者たちが体験しながら学んでいくワークショップが中心におこなわれた。クラスは、(1) 緊急時対応計画と現場での救急法 (2) 復帰直前の機能的リハビリテーション (3) 障害予防のためのテーピングと題された 3 つの内、午前と午後で 1 つずつのワークショップが受講できるように設定されていた。すべてのワークショップは、初日と 2 日目のセミナーを応用して、知識だけでな

く現場で使える技術を実際に体験しながら学んでいくという実践的なものであった。

### Ⅲ．課題の提案

6 日間に渡るワールドコンgres及び NATA 年次総会への参加を通して多くのことを勉強できた。と同時に、これから日本でもアスレティックトレーナーがヘルスケアの専門家として認められるため、国や大学そして個人単位で取り組むべき課題をいくつか見出すことができたので以下に紹介したいと思う。

#### 1. 業界団体とその活動

まず 1 つ目は、日本におけるアスレティックトレーナーにとっての業界団体の仕組みに大きな改善の必要性があるということである。アメリカでは NATA がアスレティックトレーナーの唯一の業界団体であり、アスレティックトレーナーをヘルスケアの専門家と世間で認めてもらうため、ワールドコンgresや NATA 年次総会をはじめとして様々な活動をおこなっている。それに対し日本では、アスレティックトレーナーの資格を認定する日本体育協会や、Japan Athletic Trainers' Organization (JATO) などの団体が存在してはいるが、アスレティックトレーナーの認知度を世間に広めるための具体的な策がはっきりと見えてこないと言える<sup>4)</sup>。また、アメリカやヨーロッパのスポーツ現場ではヘルスケアの専門家として活動するためにその国で唯一認可されている資格を必ず所有しなくてはならないのに対し、日本ではアスレティックトレーナーの資格、柔道整復師の資格、鍼灸師の資格、そして理学療法士の資格など、様々な資格を所有した人達が、俗にいう“トレーナー”としてスポーツの現場で活動しているのが現状である。日本でこのような状態が今後続くようであるならばアスレティックトレーナーという仕事の認知度を世間一般で上げていくことは難しいであろう。土台のしっかりした業界団体でアスレティックトレーナーたちが協力しあい、一般の人向けのセミナーや PR を率先的におこなっていくことが必要ではないだろうか。

## 2. 国際交流

日本の、主に大学単位でのアスレティックトレーニングにおける国際交流の機会の場をさらに増やすべきではないだろうか。例えば、仙台大学ではハワイ大学との提携で遠隔授業や短期スクーリングを用い、アメリカのアスレティックトレーニングを学ぶ機会を設けている。また、ある大学ではアメリカの大学とのプログラム提携により、NATA 公認アスレティックトレーナー取得カリキュラムを模索中であると、ワールド कांग्रेसに参加していたアスレティックトレーナーの方に伺った。このような大学間での国際交流や提携が、他の多くの大学でも盛んにおこなわれれば、日本のアスレティックトレーニングの質と世間での認知度は向上していくと考えられる。

## 3. 傷（障）害に対する概念

前述したとおり、日本のスポーツ現場で活動している“トレーナー”は、アスレティックトレーナーだけではなく、柔道整復師、鍼灸師、そして理学療法士が存在するが、残念ながらそこに日本のスポーツ界でのスポーツ傷害に対する意識の低さが感じられる。なぜなら、多くの指導者や選手たちは、傷（障）害を負ってしまった後に痛みをとるための治療が第一だと考えているように見受けられるからだ。確かに、痛みをとることだけを考えれば、柔道整復師や鍼灸師のもとで治療を受けることが得策であろう。しかし、アスレティックトレーナーという立場からは、痛みをとることだけでは根本的な解決には繋がらないことを伝えなければならない。アスレティックトレーニングテキストによれば、アスレティックトレーナーの責任と役割は大きく分けて6つに分けられる。それらは、（1）スポーツ傷（障）害の予防（2）傷（障）害の認識、評価、所見、（3）傷（障）害の応急処置（4）傷（障）害のケア、リハビリテーション、リコンディショニング（5）施設などの管理・運営（6）プロとしての発展、である<sup>5)</sup>。特に、傷（障）害の予防や応急処置などは、毎日練習現場に携わっていいなければ対処できない場合が多い。現在の日本のスポーツ現場の概念であ

る、“ケガをしてからいかに早く痛みをとるか”ということだけではなく、ケガをしないためにはスポーツの現場でどのような予防をしなければならないのかをまず念頭において考えるべきではないだろうか。そして、実際に傷（障）害が起きてしまった時にも迅速に正しい判断をくだし、そのケガを最小限に止めることを重要視できればスポーツ現場でのアスレティックトレーナーの必要性が見出されてくるのではないだろうか。

## IV. 結論

上記した3つの課題をどのように対処し改善していく事ができるか。それがアスレティックトレーナーを今後日本でヘルスケアの専門職として位置づけさせていくための重要な問題であると考えられる。そのためにも日本のアスレティックトレーニングの発展に必要なことを3項目下記に提案したい。

### 1. 研究の奨励

日本でアスレティックトレーニングの認知度を高めるためには、業界団体や大学がアスレティックトレーナーの重要性を訴えていくべきであると言える。しかし、そのためには業界団体や大学がアスレティックトレーニングの教育カリキュラムをより充実させたものにしていかなければならない。その方法の1つとして、業界団体や大学が学生や教員にもっと研究を奨励するべきである。医学界を始めとする多くの専門分野がこれまで発展してきた経緯に、研究をおこない新しい発見をすることで、その分野の必要性を世間に訴えることに成功してきたことがあげられる。JATO や日本体育協会、そして各大学が、アスレティックトレーニングにおける研究を奨励・助成することで、スポーツ業界でのアスレティックトレーナーの必要性を世間に訴え、本国でのアスレティックトレーナーの発展に貢献できるのではないだろうか。

### 2. 国際交流

アスレティックトレーニングにおいて発展途上である日本はより多くの情報を海外から入手

し学ばなければいけない。例えば、仙台大学では、国際交流の一環としてハワイ大学との短期スクーリングやインターネットを利用した遠隔授業など、すでに多くの国際交流を率先しておこなっている。このように、アメリカの大学はもとよりヨーロッパの大学などとも交流することで、より多くのスポーツヘルスケアに関する情報を入手する機会を増やすことができると考えられる。また、生徒間のみならず、教員たちも短期で勉強する機会を設けられれば、大学のアスレティックトレーニング教育の質をより高められるのではないだろうか。また、海外の大学の生徒や教員たちを日本の大学へ招き、国内で活動しているアスレティックトレーナーたちも参加できるセミナーやワークショップなどをおこなうことで、交流の場や情報交換の場となり、日本のアスレティックトレーニングの発展に繋がると考えられる。

### 3. 救急時対応計画の必要性を訴える

現在のところ、柔道整復師、鍼灸師、理学療法士の方々が”トレーナー”としてスポーツ現場で活躍しているのが日本における実態である。それを踏まえて、今後アスレティックトレーナーがスポーツ現場でヘルスケアの中心になるためには、他の職種とは違う卓越した専門知識や技術を証明していかななくてはならない。

ワールドコンgress初日のセミナーでおこなわれた、“緊急時対応計画と現場での救急法”で最も強調されたことがある。それは、Emergency Action Plan (EAP = 救急時対応計画表) の必要性和救急時の対応技術を身につけるということであった。スポーツ現場の緊急時において、各チームに専属のアスレティックトレーナーが存在し、その現場に居合わせ対応することが最も望ましいことではある。しかし、それを実現するのはなかなか困難なのが現状だ。各スポーツチームの練習現場や試合会場において、アスレティックトレーナーの指導のもとコーチングスタッフや施設スタッフが、緊急時にどのような対応をしてそのアスリートを病院まで搬送するのかを理解しておく必要がある。アスレティックトレーナー自らが各学校の

スポーツチームやスポーツ関連施設の人達に訴えかけ、緊急時対応計画表の作成を手伝い、シミュレーションをおこないながら指導していくことがとても大切であると考えられる。また、地域の救急施設などとも情報交換や連携を取り合いスムーズに緊急時の対応を図ることができれば、アスレティックトレーナーの必要性を理解してもらうことができるであろう。

学校やスポーツ施設においても、これまでに人命に関わりかねない大きな傷（障）害が起きているのは明らかで、これからもいつ何時このスポーツ現場でそのような傷（障）害が起これることも限らない。各スポーツチームに最低1人のアスレティックトレーナーがいることを実現するのは困難であるが、アスレティックトレーナーの必要性を理解してもらうことができれば、各学校やスポーツ施設に最低1人のアスレティックトレーナーを配置するという理想も現実味を帯びてくるのではないだろうか。

## V. おわりに

この度ワールドコンgress及びNATA 年次総会に参加するにあたって、世界のスポーツ現場でヘルスケアの専門家として働く方々と交流や情報交換する機会を与えてもらった。そして、彼ら専門家達の生の声を聞き、アスレチックトレーナーの必要性が確実に高まってきていると身をもって感じた。日本においては、アスレチックトレーナーの認知度が徐々に高まってきてはいるもののまだまだ発展途上であり、スポーツにより高い人気や興味が注がれている北米やヨーロッパと比べてみると大幅に遅れていることは明らかである。今まではアメリカのアスレチックトレーナーがスポーツ現場で働くヘルスケアの専門家として先頭を立っていると考えていたが、カナダのアスレチックセラピスト、そしてヨーロッパでのフィジオセラピストと呼ばれる人達も、アメリカのアスレチックトレーナーと同等の認知度を各国で定着させ、専門職としての地位を築いていることを学ぶことができた。日本のみならず、他のアジアの国々では、スポーツ現場で働くヘルスケアの専門職はまだ確立されていない。

アスレティックトレーナー一人ひとり、そして大きな影響力を持つ大学や業界団体それぞれが今後のアスレティックトレーニングの発展にどのように貢献していくべきなのであろうか。やはり、様々な方法で世間にアスレティックトレーナーの必要性を訴えていき、土台を築かなければならない。個人単位では、可能な限り人の前に立ち、講義やセミナーを通してアスレティックトレーナーの仕事を理解してもらう努力により務めるべきであり、大学単位では、他の専門分野の職種が地位を獲得してきたように、国際交流を通して世界全域から情報を取り入れ、スポーツ傷（障）害を始めとする専門分野の研究結果を発信していくべきである。そして、業界団体においては、各分野で活躍しているアスレティックトレーナーが安心して働ける仕組みを提供していくための基盤のしっかりした組織作りをしていくべきである。それら3者間での連携が上手く保たれば日本でのアスレティックトレーニングの未来も確実なものになるであろう。

## 参考文献

- 1) アスレティックトレーニング・セラピー世界連合 (The World Federation of Athletic Training and Therapy = WFATT) の使命と目的について <http://www.wfatt.org>
- 2) 全米アスレティックトレーニング協会 (National Athletic Trainer's Association = NATA) について <http://www.nata.org>
- 3) Carolyn Kisner et.al. 膝前十字靭帯整復手術後のリハビリテーションについて. Therapeutic Exercise Foundations and Techniques. Fourth Edition. p535~543
- 4) 馬場宏輝、石山信男 (2007) 日本におけるアスレティックトレーナー界の発展に関する提案. 仙台大学紀要第 39 巻第 1 号 p 44~57
- 5) Daniel D. Arnheim et.al. アスレティックトレーナーの役割と責任について. Principles of Athletic Training Tenth Edition. p 2~34